

タイ紀行

バンコク

窓を開けると、蒸し暑い南国の風が、さまざまな匂いと音とをのせて、冷房の効いたホテルの部屋に飛び込んできた。オートバイやサムロ¹の騒音に混じって、街角で果物などを売る物売りのかまびすしい呼び声が聞えてくる。

さまざまな果物の香りやムツとする草いきれ、あるいは揚げ物につかうヤシ^{あぶら}油の強烈な匂いなどが風によって部屋に吹き込んでくる。まぎれもない「東南アジア」が眼の前に広がっている。

「やっと東南アジアに戻ってくることができた。思えば、これまで、無菌^{むきん}包装^{ほうそう}の食べ物のように、人間の匂いのまったくしない東京のコンクリート・ジャングルのなかで、私はどんなにかこの匂いを、この喧騒^{けんそう}を夢見たことだろう。」

私はほんものの東南アジアの空気を胸いっぱい吸い込んだ。

数年前の春休み、私はサブテーマとしているタイ史研究の史料を収集するため、バンコクを訪れた。

よく、旅の楽しみはひとりで歩きまわることだというのが、私もまた「ひとり歩き派」である。ガイドブックや地図をたよりに異国の街を路地^{ろじ}から路地へと歩きまわり、屋台や大衆食堂で地元の人と同じものを食べる。あるいは、出稼ぎの人々でいっぱいの長距離バスで旅を続けては、名も知らぬ街の旅社^{りょしゃ}の白壁^{しろかべ}を這うヤモリを見ながら眠る。私にとって、旅の醍醐味^{だいごみ}はこれに尽きる。なぜなら、こういう旅をすることによってのみ、通常の観光コースを辿っていたのではわからない現地の人々の生の生活の一端^{いったん}に触れることができるし、また、その間に体験する思いもかけない発見や出会い、そして別れは、月並みな表現だが、旅は人生の縮図であることを実感させてくれるからである。

かつて東南アジア政策を打ち出した福田元首相の提唱した「こころとこころの理解」とは、我々一人一人がこういう体験を積み重ねることによって、はじめて達成できるのではないだろうか？

余談はさておき、ここでは、今回のタイ旅行の白眉^{はくび}、古都アユタヤ訪問の1日を、旅日記をもとに再現してみることにしたい。

朝7時半、泊まっていたバンコクのホテルのロビーへ降りて行くと、現地旅行社のガイドが来ていた。

今日、他の人々はバンコク市内の観光に出かけることになっているが、私は今度の旅のも

目的のひとつ、アユタヤへ行くつもりなので、日帰りツアーを予約してくれるように、昨夜頼んでおいたのだ。

ところが、彼の説明では、あいにく今日のアユタヤ行きのツアーは休みとのである。東南



タイ中央部地図、「地球の歩き方・タイ」より

アジアでは、こんなことは日常茶飯事なので、いちいち腹を立ててはきりが無い。まずは朝食を摂ってから、対策を考えることにしよう。

食事を摂りながら、添乗員やガイドに相談すると、近くのナライ・ホテルまで行けば他社のツアーがあるかもしれないという。だめなら一人で行くというと、添乗員もガイドも、外国人がひとりで行くのは無理だと、しきりに留める。

そこで、とりあえず、ナライ・ホテルまで行き、問い合わせた上で、だめなら一人で行くこと、密かに腹を固めた。

朝食の後、心配そうな顔の添乗員らを後に、私はホテルを出た。

タイでは4月から6月が夏なので、陽射しもひととき強く、サングラスなしでは歩けない。そのうえ、バンコクはチャオプラヤー川²のデルタ地帯に開けた都会で、街の大部分がゼロメートル地帯にあるので、湿度がきわめて高く、少し歩くとたちまち汗がどっと吹き出てきた。

ようやくナライ・ホテルを見つけて、フロント嬢にアユタヤツアーの有無を問い合わせると、やはり今日は無いとのこと。こうなることを密かに願いつつも、一方、心のどこかにはまだ冷房バスと英語のガイドへの期待が残っていた私は、ここできっぱりと快適な外人向けツアーへの未練^{みれん}を捨てて、ナライ・ホテルを後にした。

タクシー

タイは東南アジアのなかで欧米の植民地化を免れた唯一の国であり、その国民は、チャクリ王朝ラーマ九世プミポン・アドゥンヤデート国王陛下^{かしら}を頭に戴く、誇り高きタイ民族である。国民の間に独立自尊の意識が高いせいか、他の東南アジア諸国や、最近の日本のように、外国語の看板がやたらに氾濫するといったこともなく、街の看板はも

¹オート三輪のタクシー

² 俗にいうメナム川。タイ語で「メー・ナム」は「水の母」つまり「川」という普通名詞である。従って「メナム川」では「川・川」となってしまう、意味を成さない。

っばらツツノオトシゴのような形をしたタイ文字でのみ書かれているので、我々のようにタイ文字が読めない外国人にとっては不便このうえない。しかし、我々にとっては有り難いことに、この国の経済を牛耳っている華僑たちが漢字の看板を出しているのです、それらの漢字を頼りに、何の商いかぐらいはなんとか見分けることができる。

ちなみに、観光客の出入りする一流ホテルや土産物店を除けば、英語はまったくと言ってよいほど通じない。

そこで、私はあらかじめ持ってきた「タイ語会話練習帳」を取り出し、ドロナワ式のタイ語学習を試みることにした。やってみると、タイ語には5つの声調^{せいちょう}があるなど、初心者には難しい点がある反面、動詞の活用がない点など中国語によく似ているところが多いので、中国語の分かる私にとっては、わりあい簡単に覚えられそうな気がした。

私はまず、ホテルのフロント嬢から「バスターミナル」という単語を教わってからホテルを出ると、早速向こうからやって来たタクシーを捕まえて「パイ・モーチット・ラーカー・キーパーツ？」(バスターミナルまでいくらかね?)と値段交渉を始めた。

タイではタクシーにメーターがついていないので、すべて乗る前に値段交渉をしなければならない。もっと正確にいうと、バンコクのタクシーのほとんどは十数年前に日本を走っていたタクシーの中古車だから「メーターはついている」のである。ただし、使わない。いや、そもそもメーターは円表示なのだから「使えない」というほうが正しい。

その上、地理不案内な外国人は、よほど注意しないと倍以上の料金をふっかけられる恐れがある。そこで、私はあらかじめ、行き先までのおよその距離を地図で見っておき、ホテルのフロントなどで相場^{そうば}を聞いておくことにした。

市内なら20パーツ³が相場だが、バスターミナルは郊外なので、30ないし40パーツ位だろうと予想していると、運転手は50パーツだという。30パーツにしろ、という、ダメだと手を振って行ってしまった。

次のタクシーを止めて、また交渉再開。ようやく40パーツで妥協して乗ることにした。このようにいちいち値段交渉するのが面倒だと思うのは我々外国人だけで、タイの人々にとっては、これが買い物の楽しみのひとつとなっているらしい。彼らにとっては、値段交渉のない買い物など、まるで塩気^{しおけ}のない食事のようなもので、およそ考えられないだろう。最近では、日本と同じ形式のスーパーマーケットなども出来てはいるが、これはあくまでバンコク市内の一部に限られていて、日本のように、どんな地方都市にもスーパーマーケットやコンビニエンスストアが普及している状況とはまったく異なっている。

もっとも、私にはメーターのないタイのタクシーのほうが有り難い。なぜなら、ここではいったん交渉が成立してしまえば、日本のタクシーのように、カチカチと上がるメーターの音を気にせず、ゆっくりと車窓の風景を楽しんでいられるからだ。

また、もうひとつ便利な点がある。車検^{しゃけんせいど}制度のないこの国では、タクシーのほとんどが耐用^{たいよう}

³ 当時1パーツは約10円だった。

年限を過ぎているので、床に穴のあいている車が多い。この穴が、ミカンの食べかすやバナナの皮などを捨てるのにとっても都合がいいのだ。

ただし、バンコクのタクシーには、ドアの鍵がまともに掛かる車は少なく、たいていは針金で留めてあるだけなので、間違ってもドアに寄りかからぬことだ。

それにしても、華僑資本のこの国への浸透ぶりは、我々の想像を超えるものがある。大通りの商店のほとんどが、タイ語と並んで漢字の看板を掲げている。たとえば、「タナーカン・クルンテプ」(首都銀行)というタイ語名の横に「京都銀行」と漢字で書き添えてあるという具合だ。私は、はじめ、この「京都銀行」の看板を見たとき、日本の「京都銀行」がタイへ進出しているのかと錯覚したほどである。

そういえば、昨夜ホテルのロビーで紹介された、地元旅行社の社長だという30歳前後のこぶとりの青年も自分は華僑だと名乗っていた。

もっとも、華僑とはいっても、彼らのほとんどは、タイ語で「ルーク・チン」つまり「中国人の子孫」と呼ばれるタイ生まれの人々である。彼等は教育もタイで受けているため、日常会話もすべてタイ語で、名前もタイ語名を名乗っているのが普通である。

この青年社長の場合もまた、私がためしに北京語(標準語)で話しかけて見ると、たどたどしい北京語で、自分は中国名を徐じょといい、先祖は客家人だと答えたので、はじめて彼が「ルーク・チン」だと判明したのである。

このように、タイ華僑はこの国の社会の各層にあまりにも深く浸透しているため、もはやタイ人と華僑との区別はつかなくなっているというのが実情のようだ。

長距離バス

こんなことを考えているうちに、車はまもなく郊外へ出て、ドンムアン空港へ通ずる4車線のパホンヨティン通りを抜けて、まもなくバスターミナルへ着いた。

ターミナルとはいっても名ばかりで、実際には場末の市場のようなところである。油じみた駐車場には、屋根に補給用のガソリンを積めた石油缶や乗客の荷物を満載したバスがあちこちに停まっており、その真中に2階建てのターミナルとおぼしき建物があった。

なかへ入ると、行き先別の出札口が並んでいる。おぼろげなタイ語の知識を頼りにひとわたり見渡すと、全国各地への長距離バスは、みなここから出るらしく、北はチェンマイからラオス国境に近いノンカイなど、あらゆる地名が掲示してある。なかでもアユタヤ行きだけは、外国人観光客が来るものと見えて、ローマ字で書いてあった。ほっとして、そこへ行き、切符を買った。

「パイ・アユッタヤー・ラーカー・タオライ・カップ?」(アユタヤまでいくらですか?)と尋ねると、「シプ・パーツ」(10パーツ)とのことだ。

アユタヤまでは約75キロもあるのに、たった10パーツとは、いくら物価の安いタイで

もちょっと安すぎる。もしや、私のへたなタイ語の発音のために、こちらの意思が正しく伝わらなかったのではないかと、思い、もう一度問いただしてみると、出札嬢は「チャイカ」(そうですよ)とってにこにこしている。まったくタイの物価の安さには驚くばかりだ。

出札口で教えられたとおりのバスに乗ると、車内はわりあい空いていた。

中ほどに20歳前後の青年男女が4-5人乗っていて、物珍しそうにちらちらと私のほう



アユタヤで雇ったサムロ(オート三輪)のタクシーの前に立つ筆者(1979年3月)

を盗み見てはなにか話している。私が「サワディー」(こんにちわ)と話しかけると、たちまち彼らの質問責めにあってしまった。聞けば、彼らはバンコクに遊びに出てきたアユタヤの人達で、これから帰宅するところだという。

私がおもっていた日本の煙草を差し出すと、はにかみながら「コブクンカップ」(有難う)とって、煙草を指の間に挟んで合掌

する様子が、まことに純朴そうでは見えなかった。私はまったく煙草を吸わないが、アジアの国々を旅する時にはよく日本煙草

を持参する。なぜなら、これが地元の人々とのコミュニケーションを図るにはよいきっかけとなるからだ。

バンコク郊外の大通りには、道の両側に水溜りもしくは溜め池の続いているところが多い。これは元来、バンコクの主要な交通路だった「クロン」(運河)を埋め立てて道路が造られた名残なのだろう。というのは、そもそも19世紀にいたるまで、バンコク市内には車の通れるような道路というものが存在しなかったのである。今日バンコク市内の目抜き通りのひとつチャルンクルン通りが俗に「ニューロード」と呼ばれているのは、この通りがバンコクで始めて作られた近代的な道路だったからである。つまり、その名前とは裏腹に、この通りはバンコクで一番古い通りなのである。

バスの車窓から見ると、溜め池に網を打って朝食のおかずを取っている姿があちこちに見られる。このように、自宅の前の池で魚を捕り、庭に生えるヤシの実やバナナなどを食べたり、裏の田んぼで米を作って食べていけば、少なくとも衣食住に困るということはないだろう。「サヌック」(快適)か「マイ・サヌック」(不快)か、を善悪の価値基準とするタイ人特有の楽天的な性格も、こうした豊かな自然を背景にしてこそ生まれたものであろう。タイの人々ののんびりとした生活を見るにつけても、なまじ「先進国」に住む我々と較べて、はたしてどちらが「貧困」なのか、どちらが「幸福」なのか、と考え込まざるを得ない。

バスはサラブリ街道をアユタヤ目指して走って行く。道の両側は、本来なら、緑なす水田地帯であるはずだが、いまはあいにく乾季なので、一面茫漠たる「土漠」と化していて、時折見かける村のワット（寺）の木立を除くと、一木一草も生えていない。水路の水も干上がって、真夏の太陽がじりじりと照りつける国道を、バスはもうもうたる砂埃を舞い上げて走って行く。いまさらながら、デルタ地帯における灌漑の重要性を思い知らされる光景であった。

時折、バスが街道沿いの田舎町に入ってスピードを緩めると、さまざまな物売りが先を争って乗り込んで来る。ビニール袋にストローを挿し込んだジュース、宝くじ、米菓子、蘭の花のレイなど、さまざまなものを売り歩く。自動販売機とスーパーマーケットの普及する前の日本と同じような光景を眼にすると、おもわず懐かしさが胸にこみあげて来た。

かくして午前11時半、前方に聳えるパゴダを望みつつ、バスはアユタヤに到着した。バスを降りると、さっそくサム口（オート三輪）のタクシーが集ってきた。そのなかで、30歳くらいの「タイ式英語」を話す、わりあいおとなしそうな運転手と値段の交渉をした結果、半日10ドルでアユタヤ見物をする事になった。



上：アユタヤ旧王宮遺跡に立つ筆者、1767年、ビルマ軍の攻撃により灰燼に帰した
右；アユタヤ、ワット・ヤイチャイモンコン境内に立つ筆者（1979年3月）



アユタヤ

アユタヤは古来、チャオプラヤーをはじめとする3本の河の合流点に発達した商業交通の要衝であった。

14世紀にタイ西部のウートン地方の太守が北方のスコタイ王朝の支配を脱して、この地に新王朝を開いたことによって、その繁栄は頂点に達した。

アユタヤ王朝は、王室みずからがジャンク船を仕立てて、中国や琉球などに派遣するなど、海上貿易を積極的に行うことによって富を蓄えた。このため、首都アユタヤには貿易の利を求める人々が世界中から集り、17世紀には有名な山田長政を首領とするバーン・ジープン（日本町）なども建設された。

しかし1767年、コンバウン朝ビルマの王、シンピュウシンの率いるビルマ軍の総攻撃に遭い、王都アユタヤは灰燼に帰した。以後、政治、経済の中心はさらに下流のトンブリへ、さらにその対岸のクルンテープ（バンコク）へと移って行ったのである。

現在のアユタヤは人口数万の一地方都市となっており、旧王城の内外に林立する無数のパゴダが往時の面影を今に伝えているに過ぎない。

アユタヤの各遺跡についての詳しい解説はやや専門的に過ぎるので、ここでは省くことにして、ただ2～3、とくに印象に残った事を記しておきたい。



左；ワット・パナンチュンの境内で演じられていた田舎芝居
右；ワット・パナンチュンの船着場に立つ筆者（1979年3月）

ワット・パナンチュンはアユタヤ最古の大仏を祀る寺である。

本堂の入り口で靴を脱ぎ、入り口横に座っている花売りのおばさんから蓮の花と線香、それに藁半紙に挟んだ5センチ四方ほどの金箔を買って中へ入る。

薄暗い室内には、中央に高さ約30メートルの金色の大仏が安置され、両側の祭壇に捧げられた無数の白蓮が美しい。

拝礼が終わると、大仏の膝のところへ行き、金箔を貼り付ける。これがタイ式の参詣のやり方である。べたべたとところ構わず貼り付けられた金箔は我々の美的感覚にはほど遠いが、信仰と美的感覚とは別物なのであろう。

本堂の裏手に回ると、広場の一角でラコンと呼ばれる田舎芝居をやっていた。田舎の神社の神楽殿のような建物のなかに舞台がしつらえられていて、10人ほどの子供たちがじっと座って真剣なまなざしで芝居に見入っている。舞台の傍らにはラナート（木琴）やソナ（チャルメラ）などで構成された楽団がときどき思い出したようにポロン・ポロロン、ヒヤラヒヤララというのどかな音を響かせている。



左；アユタヤで雇ったサムロの運転手さんと船着場で記念撮影
右；アユタヤの大衆食堂で昼食を摂る筆者（1979年3月）

一方、舞台の手前には、屋台の上にカマドがしつらえられていて、50がらみの威勢のいいおばさんが、芝居などには目もくれずに、首にかけたタオルの手ぬぐいで汗を拭き拭き、炒め物を料理している。

あたかも江戸時代の村芝居を見ているように悠長な時の流れが印象深かった。

幾つかの寺を見て回った後、道端の食堂に入って遅い昼食を摂った。

赤サビの浮いたトタン葺きのひさしをくぐると、入り口の傍らで店のおやじがしきりに揚げ物をしていた。土間には犬が一匹、所在なげに昼寝している。

カウパツ（チャーハン）とサイダー2本で12パーツだった。チャーハンの皿は縁が欠けていて、見かけは悪いが味はなかなかよい。ただ、生の長ネギや匂いの強いパクチ⁴、それにナム・プラー⁵の生臭い匂いがするので、慣れない人はちょっと口にできないかも知れない。

食後に手を洗おうと思って裏手へ回ると、店の店員らしい女の子が2人、天秤棒で水壺を担いできて茶色に濁った水を大きな茶色の甕の中へ汲み込んでいる。川からそのまま水を汲んできているらしい。こんな水で料理したのかと思うと、あまりいい気持ちはしなかったが、まあ火を通したものは大丈夫だろうと自分を納得させた。私の胃腸は割合に「南方向き」に出来ているが、それでも念のため、そっと正露丸を呑んでおいた。

午後は博物館などを見学して、最後にワット・マハータート（王宮寺院跡）までやってく

⁴ 香菜、コリアンダー。三つ葉の匂いをきつくしたような香りがする。東南アジアの料理には欠かせない。

⁵ 魚醤油。ベトナム料理で使うヌオック・ナムとほぼ同じもの。日本では秋田のしょつつるがこれと同系統の調味料である。

ると、10歳前後ぐらいの一人の少年が新聞紙にくるんだ青銅製の仏像をもって私の方へ近づいてきて「買って欲しくないか？」と言ってきた。

こういうところで売りに来る仏像には偽物が多いと聞いていたので、とりあわないでいると、なおもしつこくつきまとして来た。

そこで試しに手に取って端をすこしこすってみると、どうやらこれは本物のアユタヤ仏らしい。



アユタヤからバンパインまでチャオプラヤー川の川下りを楽しむ筆者、当時筆者は27歳、インド思想に傾倒してこのような特製の白いネルー帽を母に縫ってもらい、愛用していた。タイではこのようなルア・カムファークと呼ばれる細長い船体の船が人々の交通手段として使われている。
(1979年3月)

値段を聞くと60ドルだという。冗談じゃないと、取り合わないでいると、とうとう30ドルになった。

タイの法律では骨董品の国外持ち出しを禁止しているので、もし帰国の際バンコク空港の税関で見つかれば、即刻没収されてしまい、30ドルはファイになってしまう。私が

買うのを躊躇していると、少年は、この仏像を売って自分と兄弟の学費に充てるのだという。そう言われると私はヨワいのだ。たとえウソでも、幼い兄弟の学費の助けになるならば、という気がして、我ながら「甘い」と思いつつも、とうとう30ドルでこの仏像を買ってしまったのである。御仏が私の気持ちを汲んでくださったのかどうか知らないが、その後、この青銅仏はまんまと税関を通り抜けて、無事日本に持ち帰ることが出来た。そして知己の僧に回向してもらい、灌仏会の佳日に無事わが家の仏壇にお祀りすることが出来たのである。

日本町

さてアユタヤ観光の帰途、私はチャオプラヤー川の棧橋でサム口の運転手にあっせんしてもらい、一艘の屋形船を雇い、途中、日本町の遺跡を訪れてから下流のバンパインまで約1時間の川下りを楽しむことにした。

川の水は茶色に濁っているが、川辺の人々は、そんなことには一向構わずに「アプナム」（水浴び）をしたり、食器を洗ったり、さらには口を漱いだりしている。日本では金魚鉢に入れる水草ホテイアオイの親玉のような大きな水草が上流からたくさん流れてくる。

10分ほど川を下ると日本町跡に着いた。

棧橋を降りると、前方の木立の中に朽ち果てた木の鳥居が立っており、傍らにバンコク日本人会が建てた真新しい由來書の碑が立っていた。

私が石碑を見ていると、奥の茶店から赤銅色に日焼けした一人の老婆が出て来てしきりに手招きするので行って見ると、熱い烏龍茶をふるまってくれ、「サムライ」「ヤマダ」など

と日本語まじりのタイ語で説明してくれた。どうやらこの老婆がずっとこの日本町跡を歩いて来たらしく、日本人観光団の記念写真を貼った古いアルバムを見せてくれた。

「おばあちゃんはいくつ？」と聞くと、今年で85歳になるという。私が別れ際に「元気で長生きしてくださいね。」という、「コブクンカ」(ありがとう)といってしわくちゃな顔をほころばせて、ごつい手で何度も私の手を握りしめて見送ってくれた。

バンパイン

ここからさらに川を1時間ほど下るとバンパインに着いた。

ここには王室の夏の宮殿があるというのでわざわざ立ち寄ったのだが、ようやく尋ねあてて門の前まで行くと、衛兵が銃剣を持って立っていて、中へは一步も入れてくれない。見学中止のわけを聞こうにも、そんな複雑な表現は私の貧弱なタイ語の知識では到底無理だった。

しかたがないので、道端の茶店に入ってコーラを飲んで一休みすることにした。

ふと壁の方を見ると、メニューがすべて漢字で書いてあり、店の一角には60がらみの老人が座り込んでナタマメギセルで煙草をふかしている。どうやら華僑の店らしい。

タイの華僑の90%以上は潮州系^{ちやうしやう}なので、おそらくは北京語も広東語も分からないだろうとは思ったが、念のためその老人に北京語で話しかけて見ると、驚いたことに言葉が通じるではないか。

「おじさん、離宮はなぜ閉まっているんですか？」と聞くと、彼は潮州なまりのひどい北京語で

「明日、国王陛下^{こくおうへいか}が御成りになるので、その準備をしているんですよ。」と教えてくれた。

「おじさんはどこの生まれ？」と問うと、

「わしゃ海南島の生まれで、子供の時、おやじと一緒にタイへ来たのさ。」と言いながら、傍らで遊んでいた孫たちを私に紹介してくれた。

「おじさん、どうして漢字でメニューを書いておくの？」と尋ねると、老人は少々怒ったような顔付きになって

「そりゃ、わたしたちは華人だからさ。我々は祖国の文化を大切にしなくちゃならんのだよ。

でも、孫たちはもう漢字が読めなくなってしまったなあ」と私の顔を見て嘆息した。

私はいまさらながら、華僑の人々が伝統文化に対して抱いている執着^{しやうじやくしん}心の強さを目の当たりにみる思いがした。

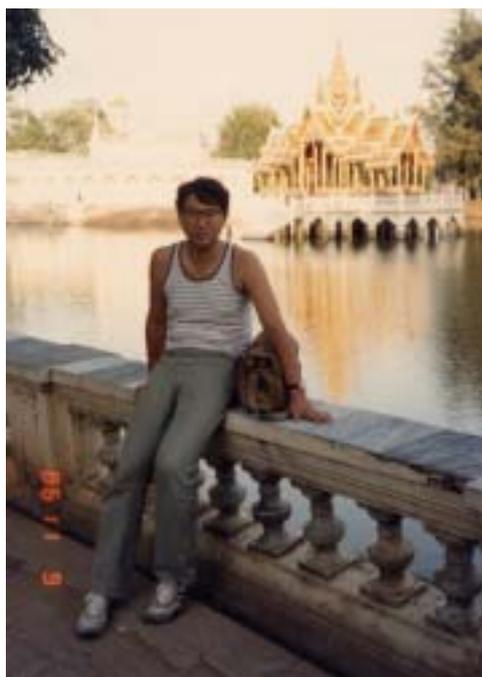
6、中国、広東省の東部、韓江の下流域に位置する県。人口107万(1994)。県政府の所在地は潮州市。秦代は南海郡に属し、晋代に海陽県が置かれ義安郡治となった。隋代より潮州と呼ばれ、元代に潮州路、明・清時代は潮州府となり府治が置かれた。1914年潮安県に改められた。周囲は米、サトウキビの栽培が盛んで人口稠密な農村で、潮州市は農産物の集散地として韓江水運と陸運の中継点であり、潮汕平野の商業・交通の中心である。夏布、刺繍や金銀細工、竹製品など伝統工業も盛んである。この地は古くから多数の華僑を送り出しており、タイの華僑に潮安出身者が多い。また唐の韓偓が左遷された地で、韓江や韓山の名はその記念である。(平凡社世界大百科事典)

かくして茶店のおやじに別れを告げ、楽しい思い出や貴重な体験を胸に抱いてバンパインからバンコク行きのバスに乗ったのは、長い夏の日もようやく暮れなんとするところであった。(1979年)

(1979年3月、当時青山学院高等部の司書教諭をしていた私は、春休みを利用してタイ旅行にでかけた。当時筆者は満27歳、元気いっぱいだったが、司書教諭の仕事が肌に合わず、なんとか転職したいと内心もがいていた。帰国後、この紀行文を青山学院の広報誌『青山学報』に掲載したところ、割合評判がよく、同僚の先生たちからも褒められたのを覚えている。この翌年、はからずも関西外国語大学からお話があり、翌年青山学院を辞して関西外国語大学へ移った。この紀行文は筆者の青山学院勤務時代に発表したほとんど唯一の文章である。)

(無断転載を禁ず。)

(2003年4月23日改稿)



バンパイン離宮の筆者、
マラヤ大学留学中にタイを再訪した
際、バンパイン離宮を参観するこ
とができた。1986年11月9日

アユタヤ(Ayutthaya)

タイ中部の都市。人口6万1000(1990)。メナム、ロップリー、パーサク3河川の合流点に位置し、バンコクから鉄道で約65km北方にある。メナム川水上交通の要衝であり、市街は運河水路に囲まれた島状になっている。1351年ラーマティボディ1世によって建設され、1767年ビルマ軍の攻撃によって陥落するまでの400年余にわたり、アユタヤ朝の首都として繁栄をきわめた。強大なアユタヤ朝の富は外国貿易によって築かれ、特に17世紀以降、アユタヤは東南アジアにおける最大の貿易基地となった。ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどの西欧諸国との交易が盛んとなり、タイの地方物産はもとより、中国、日本からの商品の集積地として栄えた。囲郭都市としてのアユタヤの南方には、メナム川に沿って外国人の居留地が展開し、ほとんどが自治を許されていた。17世紀には日本人移住民も山田長政の統率下に居留地に居住しておもに商業に従事していた。1767年の陥落以降、タイの首都は下流のトンブリー、さらにバンコクに移り、アユタヤは一地方都市にすぎなくなった。

メナム・デルタの中心に位置するアユタヤは、古くからの稲作の中心地の一つである。付近にはデルタでも最も深く湛水する地域がひろがり、農民は伝統的に生育期間の長い晩生種の稲や、深い洪水に耐える浮稲を栽培している。2m以上にも達する洪水の中で生育した稲は、全長5~6mにもなり、舟の上から稲刈りをする光景もしばしば見られる。アユタヤ近郊には、20世紀初頭以来、輸出米生産の急速な拡大にともない、大規模な新田開拓が進行した。その過程で、小農民の土地占取はもとより、王族、官僚貴族による大土地所有が進行し、多くの小作農が生まれた。今日においても、この地域は、近接するパトゥムターニーとともに、中部タイにおける土地所有問題の集積する地域の一つに数えられる。田辺 繁治
(平凡社世界大百科事典より)



アユタヤ市街地図、「地球の歩き方・タイ」より

アユタヤは3本の川の合流点にある中洲の上に形成された都市で、古来交通の要衝として栄えた。